

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和4(2022)年
9月号

通巻625号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

★発行日 令和4年9月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1-1192
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



▲気仙沼港と
気仙沼市復興祈念公園

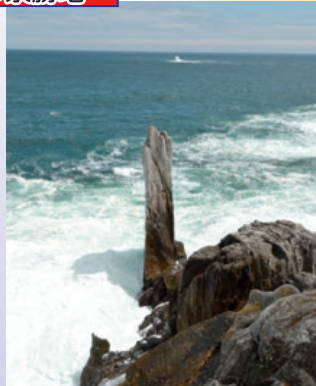


▲気仙沼市東日本大震災遺構・
伝承館もとは気仙沼向洋高校

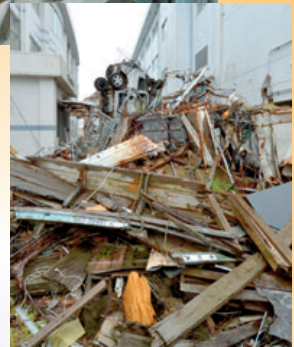
唐桑半島の景勝地



▲巨釜・水取場 入江に清水が湧く



▲巨釜の奇岩折石(16m)



F I W C 関西委員会の唐桑スタディツアーより

2022年4月 青山 哲也撮影(文 湯浅 進・4頁)

再録 昭和62(1987)年10月号『おおやまと』より

故杉山龍丸さんを追憶す

～龍丸さん没後35年～

法主 矢追日聖 (満78歳)

昭和六十二年九月二十日はお彼岸の入りで、暑くなし寒くなしの秋晴に恵まれた第三日曜日だった。この日大倭では第一七八回文化行事で、京都府相楽郡(現木津川市)加茂町にある浄瑠璃寺(九体寺)から当尾の石仏を巡拝し岩船寺まで登るコースを歩くことになっていた。午前十時三十分定刻九体寺の山門に着いた。予定の行事を終わり大倭に帰ったのが午後三時三十分だった。茶の間に腰をおろすと教務所から、「福岡の杉山龍丸さんという方が、今朝十時三十分頃、病院にて亡くなられました」という電話がありました」と知らせてくれた。

杉山さんが脳卒中で入院されたということは一年余り前から聞いていたので、是非お見舞に行かねばと思う気持は片時も離れたことはなかったのだが、終にその機に恵まれず今日の悲しい知らせに接することになった。

九月二十一日朝日新聞夕刊に氏の訃報が次の如く掲載されていた。

【杉山龍丸(すぎやま・たつまる)国際文化福祉協会総事務局長】二十日午前十時三十分、呼吸不全のため、福岡県小郡市の丸山病院で死去、六十八歳、葬儀・告別式は二十二日午後一時から福岡市博多区中呉服町九ノ二三の一行寺で。喪主は長男満丸(みつまる)氏。自宅は福岡県太宰府市国分九九九ノ三八。

怪奇小説作家夢野久作の長男。昭和三十年アジアの開発途上国を援助するため、福岡市に国際文化福祉協会を設立、ネール首相の要請でインドの砂漠で植林

を始めた。著者に『わが父・夢野久作』『砂漠緑化に挑む』など。】

故人の祖父(※杉山茂丸)は中国革命の指導者孫文と協力して、朝鮮半島から中国東北地区蒙古などへの乾燥砂漠化の問題に取り組み、植林を始められたのである。龍丸さんにもその祖父の心と血を受継がれていたのだろうか、昭和三十年インドの国民生活と産業技術の向上を目指して、砂漠緑化に私財を投入して精進せられ、砂漠における植林実験にも成功しその功績も認められて誠に芽出度いことであった。

こうした国際的なお仕事との関係で上京される機会や、また印度へ出向されることも多かった。そうした折に龍丸さんは私宅へ立寄られることもしばしばであった。お夕食のあとなどに大きな印度の地図を掲げて、砂漠の緑化・植林の在り方など、実に朗らかにあの豪放・磊落・杉山流の英語を交えた太い美声での説明が今も耳に残って懐かしく、思うだに目頭の熱くなるを覚ゆるのである。時には印度の庶民生活の実情や各地に散在する仏



▲昭46.8.1
奈良県文化会館にて、大倭教主催講演会。左3人目から森下新蔵・今井富蔵・法主・ガンジー塾の2人・杉山龍丸・五十嵐章



▲昭42.10.7
大倭神宮にて法主、杉山龍丸

跡のお話など、とても嬉しく拝聴することができて有難かった。

丁度三年前の五十九年十二月三日に『砂漠緑化に挑む』杉山龍丸著、一冊が届けられた。聞けば十一月頃と思うが今村忠生さんが福岡へ行かれ龍丸さんに会われた時、この一冊を私に届けるようにと彼に託されたようである。本の扉に著者の自筆横書きで「敬贈、矢追日聖様 一九八四・一一・二六 杉山龍丸 とうとうここまで来まして。ご健祥を祈っています。皆様によりしく敬白」とあった。

この一冊の本には、故人がこの世に生を享けてよりの人生の軌跡や使命感による業績の総てが盛り記されていて、人生の終末を予知して著作されたようにも思えるし、それは本人の知らない奥の潜在意識が宿命の終われを知り現世の足跡をとどめさせたものかも知れない。しかし我々凡人として惜しむらくは、オーストラリアの砂漠の緑化運動がこれからという時に、その動きを断たれたこと誠に残念である。龍丸さんのお役目はここまでという天命が下ったものと思う。あとは又誰か使命の人が現われて二陣三陣と続くものと確信する。

回顧するに、昭和四十三年、国際文化福祉協会発会式(四月一日、午後二時、天神ビル)に出席するため、三月三十日、愚妻鈴月、柴地則之、今井富蔵(故人)、佐藤孝子さんらと大阪発午前八時三十八分の「かもめ」で出発し、午後六時十五分に二日市温泉海玉館に到着した。龍丸さんは印度の哲学博士白髪のカカ翁ら五名を案内して近くの玉泉館に着かれた頃だった。

私達は玉泉館に赴きカカ博士に面接した。勿論初対面である。印度人ナレシー氏の通訳でカカ博士と対談を交わしたのである。私の話を通訳がカ

カ博士に伝えている間、退屈だからあちこち眺めていたところ、頭上に垂れている電灯が動き出したのに気がついた。他の電灯は静止している。話が進むにつれて揺れは益々大きくなって不気味な雰囲気を感じたが、その霊的現象はいまだに記憶も生々しい。

明くる三十一日は龍丸さんの案内でカカ博士らと一緒に太宰府天満宮、観世音寺、都樓府跡、菅崎八幡宮など、北九州古代文化の説明を聞きながら巡拝した。



昭43.3.31
太宰府天満宮にて、カカ博士(中央)

四月一日、よいお天気だった。朝食の終わった頃にかなりの地震があった。延岡で震度五、福岡は三だったようだが、発会式の朝の地震は誠に縁起のよい前兆だと思っ

四月十四日、正午すぎ龍丸さんはカカ博士ら一行を大倭へ案内して来られた。去る三月三十日からこの一行のお世話を担当された龍丸さんのご苦労は察するに余りあるが、更にその内助の奥さんの持つ成しのご心労は主人に勝るとも劣らないものと深謝して嬉しく思った。大倭へ来られたからには私が責任をもってお世話案内するので龍丸さんには僅かな間でも休養してほしいと願っていた。

この日午後から大倭神宮、菅原伏見東陵、平城旧跡、大神神社と案内したが、私の車には龍丸さんと印度人二人だった。天理を通った時、天理教の信者達はお揃いの印のハッピを着て歩いている

ので、印度人の問いに答えて大声で龍丸さんは「ハッピー」と言うと、彼は「ハッピー」と聞き返し、数回の繰返しのもと彼は怪訝な顔で静かになる。三輪山が美しく見えてきたので説明しようと思つた時、龍丸さんは子供のような丸い顔をして初々しくグウグウの大鼻という想い出の一幕もあつた。

この晩は大倭で泊まられ瑞光院にて若者達と共に座談会を催した。十六日に伊勢までお供し、外宮にてお別れをしたのであつた。



▲昭43.4.14~16
紫陽花邑にて

▼昭43.4.16
伊勢神宮外宮にて



本年九月二十二日、曇り空であつた。愚妻鈴月と柴地則之の三人が福岡市に在る杉山家の菩提寺である一行寺での葬儀・告別式に参列した。霊前に額ずいて先ず入院中のお見舞の欠礼を心からお詫びし、国際的な雑多な貢献事業に対し、或いは私個人に対しても色々ご厚意を寄せていただいたその義理人情の中の広さに涙を流しながら感謝申し上げた。

先年、贈られた著書の扉にある「モリング・オレフアラ樹を植林する杉山龍丸夫妻」の円満なお二人のカラー写真を霊前に思い浮かべ、あの頃が龍丸さんの人生に於ける最も幸福な時ではなからうかと、涙で曇る両眼を開けて祭壇に飾られた在りし日の龍丸さんの写真を眺めながら、今日奥

NPO法人むすびの家広報誌

『むすび便り』第54号より転載

▼ハンセン病療養所の入所者機関誌から

「子々孫々 父を隠せよ」

徳永 進(野の花診療所医師)

林 力さん(※注)の『始良野』(鹿児島県鹿屋市星塚町「星塚敬愛園」入所者自治会発行)の4回の連載「父ありてこそ」(2021年盛夏号・秋季号・2022年新年号・陽春号)が終わった。濃厚でぶ厚い人柄がハンセン病者、その家族、その周辺にいた人たちを包み込むように、苦難のはずの人生を結局は苦難を超えていく力を綴る文章としてまとめられている。

※注 はやしちから。元九州産業大学教授。ハンセン病家族訴訟原告団長。あらゆる差別をなくす福岡県民会議事務局局長歴任。

林さんのお父さんは43歳の時、ハンセン病のため家を出、星塚敬愛園に入所する。林さんは小学

さんにお目にかかり余りにも想像以上におやつれになった面貌を伺つてまともなお悔やみの挨拶もどかしかった。故人を想い、奥さんを思えば読経のリズムに乗つて涙は止まらなかつた。数年前にお会いした時、可愛い坊ちゃんだった長男の満丸さんがこんなに立派に成長された姿を見るにつけても嬉しく、杉山家の弥栄と故人の冥福を心からお祈り申し上げて謹んで焼香した。

奥さんのご健祥を念じつつ帰途につき、龍丸さんとの思い出の地、太宰府天満宮の神地を散策した。葬儀の帰途だから失礼かと思つたが、丁度この日は朝から祭神道真公は自宅の方へ帰られてお宮には不在(御幸祭)だったので嬉しかった。

(昭六二・一〇・一五、日聖記)

2022年 6月11日発行

校6年生。父との思い出は、父の膝に抱かれた時、父の曲がった指に触れ、伸ばしてあげようとして叱られ突き放されたことに始まる。力さんの苦勞は、父の隔離収容後、ハンセン病者の家族としての苦難として始まっていく。級友に「くされの子」と呼ばれたことも書いてある。母と東京へ引越すがうまくいかずすぐに福岡に帰つた。

苦勞の日々の中、力さんは福岡市立福岡商業高等学校に合格する。そこを大きな転換点として自立への歩みを始める。林さんの文章には作家への響きがある。父が敬愛園に入所したあと、お母さんに男が出来たことも記されている。抱き合う部屋に林さんが入ったこと、その男が後日急死したことも記される。波乱万丈である。

時は1943年、日中戦争のころ、特攻隊員を志願した友人が還ってくることはなかった。そんな戦時であつても反戦の志を生徒に語る教

師が数人いたことも大切な思い出となり、林さんの思想の発芽として書いてある。憲兵隊に連行された教師がいて、その教師の名はキリスト教から社会主義に進んだ山川均。人は思いがけない所で思いがけない大切な人に出会う。

日中戦争が終わった1945年、林さんは非行少年の教護施設で助教諭として働く。少年たちは逃亡する。林さんは焼け跡で少年らを発見し連れ戻そうとする。身上調査もする。その時少年から言われる。「ここに來とる者は人に知られとうない、言いつけない事は持つとう。辛く悲しい過去。それを言わせるならあんたが父ちゃん母ちゃんの話は話すのが筋じゃあなか？」

その指摘をきっかけに約十年ぶりに父のいる敬愛園に初めて訪ねる。刑務所の服役者のように父は面会室にやってきて一言、「大きくなったなあ」。林さんの父は患者総代や自治会議長などを歴任したが、戦後になって患者側が意気高々となり行政、医務当局に罵詈雑言を浴びせ、共感できず政治の場を去り浄土真宗寺院の設立に生涯をかけた。1962年、入所から25年後に68歳で世を去る。

話は時を逆行するが林さんの心情に大きな影響を与えたのは父の死の6年前の1956年、京都の岡崎公会堂で1922年に開かれていたひとつの集会、「全国に散在する我が特殊部落民よ、團結せよ!」「人の世に熱あれ、人間に幸せあれ」と胸を張る人たちの子孫に共感する。それらのことが重なり1974年6月、明治図書発行の『解放を問われつづけて』の中で、父から生涯子々孫々隠せと言われたことに反し、「父がら病患者である」と表明する。

「始良野」に書かれた文章は4回分をまとめて400字詰め原稿用紙で25枚くらいだ。それを合わせて読むだけで、「日本のハンセン

病の姿」がある角度からはつきりと浮かび上がる。光田健輔氏の視点と180度ズレる。ズレた対極の位置からくつきりとハンセン病の姿を捉えられた理由の一つは、林力さんが持つ包容力だろう。連載タイトルの「父ありてこそ」の父が優れた良心の人、であったことも理由だろう。林さんはハンセン病ではないハンセン病者(いわゆるノン)に見える。2022年の陽春号に掲載されている愛犬のラブラドルと一緒に憩う一枚の写真を見ていると、林さんは林さんのお父さんその人ではないか、と錯覚しそうになる。

▼唐桑スタディツアー

鈴木重雄さんとのつながり

湯浅 進(NPO法人むすびの家理事)

「交流(むすび)の家」は建設運動が始まってから来年で60年、今年は竣工後55年になる。お陰様で皆さまに支えられて大倭紫陽花邑の一角に踏み止まっている。「交流の家」には薄れゆく歴史が消え失せてしまわないよう、時には語りかけてくる「存在力」があるように思う。

少なくともなってきたが新たに「交流の家」に心を寄せる人との出会いや、これまで「交流の家」を通じてつながった人たちの縁は今も続いている。去る4月、12人のメンバーで、東日本大震災復旧支援のワークキャンプで入った(宮城県)気仙沼市唐桑町を11年振りに訪ねてきた。

59年前、「交流の家」建設を始めるに当たり、この建設のキッカケとなった(故)鶴見俊輔さんは、愛生園にいた知人の(故)鈴木重雄(園内名・田中文雄)さんを私たちに伝えてくれた。鈴木さんはこの建設運動を我が事のように受け止め、自ら表に立ってハンセン病問題を訴え、建設への協力を呼びかけ、私たちの大きな力になってくれ

た。鈴木さんはやがて社会に出てから、生まれ故郷の唐桑町(現在、気仙沼市)の町長選挙に立つ、が僅差で負ける。鈴木さんはその後地元の人から請われ社会福祉法人「洗心会」を設立、その翌年に死去。だが鈴木さんの遺志を継いだ人たちにより続けられ、今日10ヶ所以上の施設を有するまでになっている。



鈴木重雄氏胸像 (平25.8.15洗心会発行『洗心』表紙より)

59年前の「交流の家」建設での鈴木さんとの出会いが、2011年東日本大震災復旧支援の唐桑キャンプへとつながっていった。このワークキャンプを設置する時、高台にあった自宅の敷地や住居の一部を空けて全面的に受け入れてくれたのが馬場康彦さんで、現在洗心会理事長を務めている。そして震災キャンプの参加を契機に、被害者・支援者という一過性の関係を超えて唐桑に移住を決めた何人かが現れた。そのうち一人は震災直後に馬場さんのところへ馳せ参じた、当時のFIWC関西委員会委員長の佐々木(現在姓・山口)美穂。地元男性と結婚、昨年第一子をもうけた。またもう一人の加藤拓馬は唐桑キャンプ終了後、キャンプを共にしたメンバーらと町に立脚した地点から、町づくり・人づくりそして学校教育の新生を目指して活動が続いている。60年ほど前の出会いから生まれた流れが途絶えることなく、この唐桑に流れているのを感じ、感無量の思いだった。

来年60年を迎え、「交流の家」のこれからの在り方がますます大きな課題となってきますが、引き続きご意見・アドバイスを、ご支援をどうかよろしく願っています。

「神通力如是」の真意をさぐる

第二十一回

大倭教の源流にさかのぼって

じんずうりきによせ

前回の第二十回では原文と註釈のみを載せ、紙面の都合で現代語訳を掲載できませんでした。そこで今回は、まずその現代語訳を先に紹介し、さらにその訳文に対しての三つの註をつけさせていただきますました。原文の方は、前回（令和4年7月号）のものを参照してください。

その後に、今回、第二十一回の原文と註釈と現代語訳を載せさせていただきました。今回の原文は短いのですが、「皇統連綿」の解釈など重要な論点を含んでいますので、前回の註釈と併せて読んでみてください。その他にもさまざまな解釈の可能性があると思いますので、読者の皆さんも味わって深読みしてください。

なお今回は多少の余白がありますので、法主自筆の「神通力如是」原稿の写しとその説明を参考のために載せました。

神通力如是第二十回 現代語訳

11月16日 鳥見庄山の庭先にて朝の7時に太陽を拝している時。

倭姫「倭姫です。世を照らす、皇祖奇稲田姫様の御光は日本を照らします。私達の日本を照らします」

11月17日午前7時半 太陽を拝している時、自然神である天照太神（太陽神・奇稲田姫）

天照太神「昭和維新、国家の革新、国内改造を叫ぶ昭和維新の活動の裏に流れている今の日本の危機は、大倭霊界の緻密な計画をもって突破する」①

「古にもどり、かんながらの大法に基づいた世の中に立て直すという行いは、妙法によって切り抜けよう」②

大倭神宮に向って礼拝する時、倭姫が語る。

倭姫「普く世界一家を照らす私達の天皇の御神徳が、（今、日本を被っている）この闇を払い、奇稲田姫様が世の中に出ておいでになり、大倭トビノモリ（大倭神宮）に真の妙法による世直しのための天の沼矛を立てられる時、私達の日本は、かんながらの法を世に出す世界で一番目の国となります。ここにおられる皆様方、真の妙法を唱えられて一日も早くこの闇を払って、天皇の御心を安んじ奉ること、それがこの日本に生まれて来た国民としての神意にのっとった行いなのです。また大倭日高見の国に生をうけた人々は、このトビノモリ（大倭神宮）で朝夕礼拝を行いなさい。聞こえていますか、この村々に住む人達、今は悪魔に呪われているのです。

倭姫のこの言葉は神に代わって申し上げているのです。

日聖よ、土地の人が訪ねてこられることがあれば、この話を納得いくように教えてあげてください。題目、、、、。

奇稲田姫様が世界一家を照らす光は、私達の天皇の御神徳です。天皇の世は、世々永遠にめでたく続き、奇稲田姫様の光は世界一家を照らします、世界一家を照らします。

麻のように乱れているこの世を、真の妙法唱え、

神代のようなかんながらの道に戻してください。今、日本の国民には天皇のことを本心から思う者は少ないのです。ああ、嘆かわしいことです。天皇よ、心配なさることはありません。国民がどの様になっても、私達の日本は八百万余の神等があなたを守られます。

つたない行いで奇稲田姫様の御前を汚しましたこと、お許しくださいませ」

倭姫「この里を治め守っておられる土産（産土）大神よ、この土地で生まれた者達を悪魔災難から守り、五穀の実り豊かな土地であるようにしてください。またこの地から身をこの国の為にする出征兵士の方々の武運長久を祈っています。

土産大神、（私の霊統に連なる）肉体を持った輪孺香の願いである、日聖様より授かったこの娘の美壽紀が、どうぞ長命でありますように、私の勝手な願いではありませんが、お願いいたします。（題目、、、、）また私の夫（日聖）の災難をお祓いください。（題目、、、、）

山神に申します。題目による供養をしてやるのであなたも早く解脱しなさい。一緒に題目を唱えなさい。

またこの鳥見庄山に鎮まつておられます矢追家代々の諸精霊に題目供養いたします。（題目、、、、）

庄山の矢追家の御宝前（※日妙師が日常、お題目を唱えておられる仏間）にて。

中将姫「私中将姫は、お母様に申し上げます。お

母様の罪障は私の罪障でもあります。私は今日のこの日から禊を行って、一緒になってお母様の罪障をぬぐい去ります。お母様お分かりいただけなのですか。お母様の禊は本当の禊ではないのですよ。今日から真の禊を行ってください。お母様お分かりになりましたか。お母様、私がいる為に生じたこの罪障を早く取り除きましょう。母と子は一つのものなのです。その二人が一つとなって一緒に解脱の行を行います。お母様、私中将姫よりお願いいたします」

現代語訳の註

①天照太神

前回の註にも記しましたが、天照太神はタカチホ族の奉戴する天照大神ではなく、太陽神(自然神)のことであり、また、その自然神の意向を受ける人格霊、奇稲田姫のことと思われるます。

②昭和維新

ここでは①②と二つの解釈による現代語訳を並列しておきます。

③お母様の禊は(原文・母ノ禊ハ)

「禊」に「禊」と「真の禊」があるということとは何を意味するのでしょうか。考えてみました。

この中将姫物語で語られる因縁譚は特別なものではなく、一人一人の人間凡てが前世から背負ってきている「業」そのものについての言及といえます。誰でもが持っている通常は顕われない奥深い「業(カルマ)」。それはまた、通常の「禊」では禊されない重さを持っているに違いありません。それを禊ぐための「真の禊」は果して人生の中で訪れるのでしょうか？

そしてまた、その機会を得たとしても、その

時に「真の禊」を禊ぎ得ることは出来るのでしょうか？

難しいことですが、考えなくてはいけない問いかけだと思えます。

それにしても、本当にひどい目に遭わされた被害者である中将姫が加害者である継母を思いやる心のすがすがしき。継母を許し、心の底からこの事件を二人の問題としてとらえている姿は、法主の愛憎一如、相對即一体であるとの教えを見事に実践されているように思えます。憎しみある相手を切り捨てるのではなく、抱擁徳化し、互いの悪因縁を解消されようとしています。

単なる物語として読むのではなく、自分自身の心の問題として学ぶべきお話だと思います。(林)

神通力如是第二十一回 原文

同日(※11月17日)、午後八時、於鳥見庄山

「倭姫、オン前ニハベリ候、ミ神楽ソウシ申サン。今シバシオ許シアレ」題目、

「大八洲嶋、クマナク照スミ光ハ、我が日本ノ天皇ノ、我が日本ノ天皇ノ稜威ノ

光デアルゾカシ。題目、竹ノ園生ノ色マシテ、皇統^①連綿、我が日本ハメデタヤナリ。

聖壽萬歳、萬萬歳。題目、(悪魔出現する)

悪魔退散、怨敵退散、^②悪魔怨敵退散ノオン題目、エイ、エイ、エイ、エイ」題目(礼)

「ツタナキワザニテ候ヒシガ、ミカグラ舞ヒオサメ候」

註 釈

①皇統連綿

皇統…天皇の血統。連綿…絶えることなく長く続く。(岩波書店『広辞苑』より)

遺稿「大倭神宮伝承の紀 後編(上・下)」(『とおやまと』平成26年7・8月号)などに

書かれているように、大倭のスメラミコトは奇玉饒速日命を第一代とし、後世西の王族が大和に東遷した時、大和にいた大王は長曾根日子命であった。時の神意により「和の光」のもと高千穂族の狭野命に国譲りされたのが、後の神武天皇であり、スメラミコトの繋がりは昭和天皇まで繋がっている。

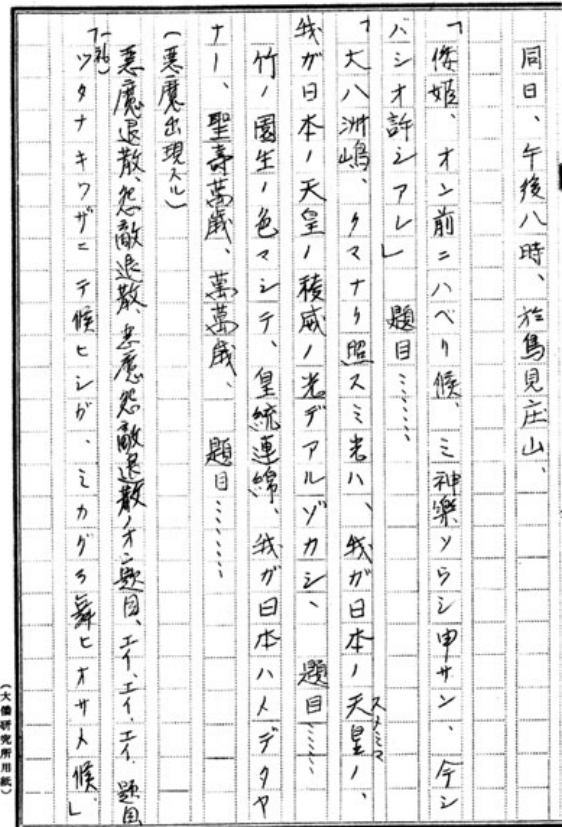
②悪魔怨敵退散ノオン題目

(悪魔出現スル)とあるように、皇統連綿を祝つての題目の言葉が邪魔するように霊界の反作用が現われたと思われる。その悪霊達に「エイ、エイ、エイ」と気合(精神を集中して事にあたる氣勢または掛け声)を入れて悪霊達を退散させている。

「気合」については、法主の実体験の話を書いておこう。瑞光院の茶の間でのお話である。

ある夜のこと睡眠中の法主が異様な邪気を感じて目を開けた時、法主の上に伸しかかってくる、すごい形相の顔が見え、法主の「ヤア」の気合イッパツで姿は消え去ったとのこと。この邪気の正体は、法主を逆恨みした「どこかのオ

6頁の原文の法主自筆原稿



原文では漢字以外はすべてカタカナで表記されているのですが、原文として活字化する段階では、神語り部分以外の法主による説明部分はひらがなにしています。また、原文では、句点（。）は使っていないので、読みやすくするための工夫として各文末では読点（、）を句点に変更しています。

【補足】栗山さんは、創作集団「えん」を主宰して、長曽根日子を主人公にした舞踊の上演や、絵物語の『倭伝承 長曽根日子命』をまとめた方です。その後移住した南九州で活躍、農業もしておられます。長曽根日子命の自決の決断について栗山さんと話し合ったことは忘れたい思い出です（『おおやまと』平成24年11月号参照）。 春

「神通力如是」第二十一回 現代語訳
 倭姫「倭姫が奇稲田姫様の御前にひかえさせていた
 いただき、これから御神楽を奏しますので、今しば
 らくお許しください。（題目）
 大八洲嶋（日本）をすみずみまで照らす御光は、
 わが日本の天皇の御威光の光であります（題目、
 、）。大倭嶋杜の竹林の色はますますあざやか
 で、ニギハヤヒノ命から始まる皇統は連続として
 続き、わが日本はめでたいことです。代々のスメ
 ラミコトの長寿をお祝いします。（題目、、）
 （悪魔出現する）
 悪魔退散せよ。怨敵退散せよ。悪魔怨敵退散の
 お題目、エイエイエイ（題目）
 倭姫（礼）「つたない技ではありませんが、御神
 楽を舞い納めさせていただきます」

法主の自筆原稿
 今回は第二十一回分の法主による自筆の原稿の
 写しを掲載することにしました。カーボン紙を使
 って複写されており、原文は二組存在します。ご
 覧のように几帳面な字体で綴られているのが印象
 的です。
 原文では、昭和16年11月6日から日米開戦日の
 12月8日までの1カ月余りの神語りを、A4版の
 原稿用紙73枚で記録しています。ということは、
 今回は11月17日の記録を掲載しているので、まだ
 全体の半分にも達していないということですが、
 この原文が納められていた木箱は、法主の書齋
 の奥のごく目立たない場所に置かれていて、生前
 の法主もこの文書の存在について語られたことが
 なく、法主帰幽後に書齋を整理していた際によ
 やく日の目を見ることがになったものです。しかし

「神通力如是」の冒頭に、法主自ら「日々ノ御宣
 託ヲ録シ後世ニ遺サムトス」と後世での公表を示
 唆されており、この一見難解で、場合によっては
 誤解を生むかもしれない神語りを、註釈や解説を
 付けながら公表することに踏み切ったのです。
 昭和16年11月、12月という軍国主義真っ只中と
 いう時代背景の中で秘かに記されたこの貴重な記
 録をじっくりと読み込んでみて下さい。（岸田）
 中島健様へ
 ▼熊本県南阿蘇村 栗山 美智子
 8月24日にお会いできて幸せでした。法主さん、
 大倭神宮の多くの神々にお会いし、これにて今
 生の最後のご挨拶と思ひながら、とてもすばらし
 い時間が流れていきました。
 大倭神宮の物語を思い起こして、私の大倭との
 縁の深さを感じ、どうしても行きたいという思い
 が実現しました。なもたかまのほらも忘れか
 けておりましたが、今世の旅が終わる時には、最
 高に幸せな人生の回顧ができると思います。本当
 にありがとうございます。
 岸野さんにお会いしたかったが出会えず少し残
 念ですが、よろしくお伝え下さい。ブルーベリー
 ジャムを送りますので、皆さんで食して下さい。
 1年経って良く熟成して食べ頃です。お元気で！

あじつ日記

8月7日 この日も猛暑、朝8時から大倭墓地清掃と9時から紫陽花邑の掃除祓。邑関係・大倭会・FIWC・大倭安宿苑等々の多くの参加者で今年も無事に終わりました。皆様へ感謝！朝、3匹目のアライグマが檻にかかっています。(翌朝がちょうど市役所の引き取り日)

8月9日 長崎原爆の日、午前11時02分、中島健さんによって拝殿の大太鼓が打ち鳴らされました。

8月12日 東光大祭・祖霊祭が滞りなく行われました。奥津斎庭で教長さんにより祖霊祭が行われている間、拝殿では映像で平成7年12月23日法主さん生前最後の降誕祭と、平成4年8月13日東光大祭法話(『おおやまと』平成21年8〜9月号に「宗教の根本―自分個人の心の修養―」「幸せになる近道―霊界人と交流する」として掲載分)。引き続き拝殿で東光大祭の祭典。その後、皆さんに経木が返されました。

コロナ禍の中、参拝者が若干増え気味。それでも遠方からは控える方が多かったです。岡山県真庭市の山崎基央・スパラック夫妻、滋賀県日野町の浅井秀明さん、東京の永坂まゆり・あづみさん等のお顔が見

えしました。

8月15日 大倭神宮において立教開宣祭が行われました。この日は、昭和20年、太平洋戦争の日本の敗戦日に当たります。

8月23日 大倭大本宮月次祭。この日は昭和41年8月(中味を聞くと実は7月らしい)23日の法話でした。『おおやまと』令和2年7月号「人間的に向上するよう自分を錬磨していく」として掲載分。

8月27日 午後6時から大倭会館で大倭町自治会役員会。

8月29日 この日突然生駒市の稲蔵神社神司・森田一彦さん、東大阪市の長田神社神司・神田正渡さん、天理市の大和神道御霊之社宮司・牧野武司さん、楠木麻矢さん、越智雅子さんが来邑。

9月1日 西斎庭に、エスティームライフ職員の専用駐車区域が決まりました。

9月3日 午後1時から交流の家で、FIWC関西委員会とNPO法人むすびの家の合同定例委員会が行われました。

9月4日 朝から大倭墓地で、第1日曜日の月例掃除。

9月6日 大倭神宮月次祭。この日は「神通力如是」に出でこられる法主の妻、輪齋香こと妙月かあさんのご命日でした(昭和25年帰幽)。

大倭会館で夜6時から邑倭の会。毎月6日に邑内の連絡確認のため開かれます。

大倭安宿苑では

8月23日 町田社会保険労務士によるセクハラ及びパワハラ防止研修会。リモートで各施設の管理監督者、管理者・役職者で可能な者が参加しました。(菅原園)

8月24日 外出の制限の中、2班に分かれてドライブ。①阪奈道路を大阪方面へ降り、マクドナルドのドライブスルーで買ったソフトクリームを食べながら景色を見ました。②奈良公園に行き鹿を眺め、職員が鹿せんべいをあげる姿を楽しみました。

8月28日 会議室でプロジェクトの大画面で花火大会の映像と音に臨場感を味わいました。(須加宮寮)

8月11日 お花を持って大倭墓地へ、お盆のお墓参り。(長曾根寮)

相変わらずで過ごしています。

(茂毛路園)

8月26日 「外出時に食べる外食」を意識した創作料理。茄子の春巻きが好評でした。(八重垣園)

8月19日 4回目のコロナワクチン接種が行われました。

▼10月末の佐渡への文化行事の準備を、コロナ禍の推移を慎重に見守りながら進めています。

大倭会通信

今年には日蓮聖人生誕八百年という特別な年でもあるので、ぜひ実現したいものです。現時点(9月12日)で30名近くの申し込みがあります。

▼9月11日に今年2回目の拝殿での禊会を行いました。中村勝彦さん(三重県四日市市)が久しぶりの参加。今回は過去の禊会参加者で、すでに帰幽された方々への思いを語り合いました。お一人お一人の顔が浮かんで、それぞれの生き様から何かと学ぶものがありました。

▼過去の文化行事(平成10年第261回〜令和2年第346回)の記録が、近く完成予定。会員の皆様にはお配りします。

▼去る7月30日に会員の下村修一郎さん(東大阪市・87歳)が帰幽されました。平成30年9月号「寸草」に登場。ご冥福を。

あんない

*月次祭(大倭神宮)
10月6日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催祝会
10月9日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

*月次祭(大倭神宮)
10月15日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮)
10月23日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

『NAGASHIMA ~“かくり”の証言~』 上映会

2022年11月3日(祝) 午後3時〜
京都「法然院」にて
会費1,000円
京都「論楽社」とむすびの家の共催
むすびの家の枠は、申込順25名まで
090-3862-6369 (湯浅) ヘショートメールで

むすびの家コンサート ~鶴見俊輔生誕100年の年に~

2022年10月15日(土) 午後1〜4時 交流の家にて
会費1,000円
(ライブ) フォークシンガー 中川五郎
(はなし) 同志社大学教授 小野文生
予約制先着40名まで
TEL. 090-1229-2040 (戸張) へ